



三重大学

医学部

No.191 2023.10.1

News

目 次

退任のご挨拶.....小川 朋子... 2

トピックス

- 〈報告〉ザンビア大学医学部訪問 澤田 博文... 3
- 令和4年度 三重大学医学部優秀論文賞表彰授与式..... 8
- 医学部オープンキャンパスを開催して..... 9
- 早期海外体験実習報告 米国での研究室研修..... 穴太 智子...10
- 早期海外体験実習報告
- WHOラオス事務所研修とラオス国立小児病院実習に参加して 太田 亜弥...11
- 海外臨床実習報告 イギリス・カーディフ大学..... 加藤俊太郎...13
- 海外臨床実習報告 フィリピン大学レイテ保健部..... 亀井 美侑...15
- 令和5年度三重県へき地医療体験実習・研修会に参加して..... 宮崎 洸匠...16
- 三重大学・鈴鹿医療科学大学合同「慢性疼痛」ワークショップに参加して..... 18

学会だより

- 第9回 MatriCellフォーラムを開催しました 川北 文博...20
- 日本脳神経外科学会中部支部学術集会「ベスト座長賞」を受賞して..... 北野詳太郎...21
- The Journal of Human Lactation Best Research Article
- with a Practice Focus Award 安積 陽子...22
- 第143回日本薬理学会近畿部会優秀発表賞 中瀬 隼斗...23
- 三重大学優秀論文・著書・作品賞を受賞して..... 小池 勇樹...24
- 第28回日本緩和医療学会学術大会優秀演題賞を受賞して..... 奥川 喜永...25
- 第32回日本病態生理学会大会
- 学部生・修士課程大学院セッション 優秀賞を受賞して..... 八十島左京...26
- 第55回日本動脈硬化学会学術集会・ポスター優秀賞受賞..... 細見 謙登...27
- 第250回日本内科学会東海地方会を開催しました 中島亜矢子...28
- 第96回日本内分泌学会学術総会 愛・内分泌賞（優秀演題賞）を受賞して..... 西濱 康太...29
- 第250回日本内科学会東海地方会若手優秀演題賞を受賞して 酒井 唯梨・辻本 佳世...29

学位記授与..... 30

退任のご挨拶

乳腺センター・乳腺外科学 小川 朋子

2008年7月より務めさせて頂いておりました乳腺センター・乳腺外科学講座教授を2023年5月末日に退職いたしました。在任中、多くの皆様に大変お世話になりましたこと、厚く御礼申し上げます。

乳腺センター・乳腺外科学講座は2008年7月に新設されましたが、着任当初は、医局員は3名、三重県内の乳腺専門医は私1人の状況でしたので、三重大学乳腺センターを三重県の乳癌診療の拠点とし、専門医を育成するというのが、乳腺センター設立時の大きな目標であり、重要なミッションでした。設立から15年を経過し、現在、医局員は20名を超え、三重県内の乳腺専門医は医局員以外の先生も加えると19名になりました。また、専門医育成に加え、三重県のどの地区でも乳癌の標準治療が受けられる体制を整えることを、私が教授として赴任した際の目標にかかげており、乳癌診療の核となる乳腺センターを各地区に作り、その乳腺センターを中心とした診療体制構築を目指してまいりました。まだ十分な体制にはなっていませんが、2017年4月には、医局員を済生会松阪総合病院、三重県立総合医療センターへ赴任させ、乳腺センターを作ることができ、三重県内での乳がん診療体制を整える第一段階は達成したと思っています。私個人としては、自分が専門として行ってきた乳癌の根治性と乳房の整容性を目指した手術である乳房オンコプラスティックサージャリーの学会総会を昨年10月に沖縄で開催させていただくこともでき、とても充実した15年間を過ごさせていただきました。ただし、乳腺センター・乳腺外科が新設されての15年間、まずは臨床面の充実に重きを置いていたことと、私自身の

能力の問題で、研究面については十分な成果をあげることはできませんでした。まだ、定年まで6年ありましたが、これ以上、私が教授を務めても今まで以上の業績をあげられるとは思わず、大学教授については後進に道を譲る良い機会と考えました。

他分野同様、乳腺外科も新しい専門医制度が導入され、新しい制度で乳腺外科専門医を育成していくことが必要となっており、三重県も、三重大学乳腺専門研修カリキュラム（基幹施設：三重大学、連携施設：伊勢赤十字病院、済生会松阪総合病院、三重県立総合医療センター、松阪中央総合病院、桑名市総合医療センター）で専門医育成にあたることとなりました。以前は若手乳腺外科医の育成是三重大学だけで行なっていましたが、嬉しいことに当科は最近5年間で11名、医局員が増



え、実際、三重大学だけで彼らの研修を行なっていくことは困難な状況にもなっておりましたので、この制度のもと、今後は、基幹施設である三重大学と三重県内の連携施設共同で若手を育てていく、という新しいステージに入ったと認識しています。私自身、今後、連携施設で乳癌手術件数が最も多

い伊勢赤十字病院に嘱託医として週3日勤務し、連携施設での若手育成に関わって参ります。

最後になりましたが、15年間にわたり教室と私にご支援いただいた全ての方にお礼を申し上げ、退任のご挨拶とさせていただきます。長い間、ありがとうございました。

トピックス

〈報告〉ザンビア大学医学部訪問

附属病院・小児・AYAがんトータルケアセンター 澤田 博文

はじめに

三重大学大学院医学系研究科は、アジア・アフリカにある協定大学からの大学院生受け入れを行う「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」を実施しており、2022年に第3期のプログラムが文部科学省から採択されています。また、COVID-19により2020年以降中断されていた医学部学生の海外臨床実習が2023年度から再開されました。この機会に、長年のパートナーシップを結ぶザンビア大学を訪問し、今後の学術交流の推進に向けての協議等を行なってきました。最近指導したザンビア大学からの留学生がザンビア帰国後に活躍中であることから、肝胆膵・移植外科 水野教授（Dr. Chipaila Jacksonを指導）と小児科 澤田（Dr. Jane Kabweを指導）で訪問しました。そして、形成外科・成島教授の指導を受け最近帰国したDr. Banda Chihenaがザンビア大学で進める「ザンビアへのマイクロサージャリー技術移転プロジェクト」に協力いただいている四日市北ロータリークラブのメンバーの方々も三重大学訪問団に同行されました。以下に報告させていただきます。

I. 日程

2023年6月10日（土）～6月17日（土）

II. 訪問メンバー

三重大学

堀 浩樹（医学系研究科長）

6月15日～18日滞在

水野 修吾（医学系研究科肝胆膵・移植外科学 教授）

6月10日～14日滞在

成島 三長（医学系研究科形成外科学 教授）

オンラインで参加

澤田 博文（医学系研究科小児科学 講師）

6月10日～17日

四日市北ロータリークラブ

（形成外科マイクロサージャリー技術移転プロジェクト）

松井 法子（ロータリー財団委員長、羽津眼科医師）

植村 秀人（ロータリークラブ幹事）

松岡 賢（ロータリークラブ次期会長、

マツオカ建機株式会社代表取締役社長）

III. 活動内容

往路：6月10日～11日

名古屋発ドバイ経由ルサカ着

6月11日 18:00～

訪問メンバーと、Drs. Jackson、Jane、Bandaを

交え、三重大学医学部からの実習生5名と実習や最近の活動について意見交換。

6月12日

1. ザンビア大学医学部訪問 9:00～

Prof. Evans Mpabalwani 医学部長表敬訪問
(2023. 6. 1 就任, 小児科医、ウイルス学専門、
東北大学留学経験あり)

(1) 三重大学医学部とザンビア大学医学部との交流プログラムについて、2020年から2022年はCOVID-19のため中止されていた学部生の臨床実習が、2023年から再開され、三重大学から5名がザンビア滞在中である。協力への感謝と今後の協力をお願いした。今後、ザンビア大学の学生の日本での実習も再開したいとの希望が示された。

(2) 国費外国人留学生優先配置プログラム(MEXTスカラシップ)での留学経験者3名が、ザンビア帰国後も三重大学との交流の下で活動中であるが、2024年度の本プログラムへの応募は2023年10月から12月である。毎年4名の採用を予定している。意欲ある候補者の応募をお願いした。年齢制限が35歳であることが課題となることがある、ザンビアでの医学部卒業年齢は28歳以上であり、地域での研修などのプログラムの後、MEXTスカラシップに応募することとなるが、35歳であると難しいケースもある。これは、いつもこのプログラムの説明の時に、最も多い質問であるという。

(3) 最近、本学形成外科で学びザンビアに帰国したBanda Chihena医師が、三重大学で学んだマイクロサージャリーの技術をザンビアに移転する目的で、トレーニングセンターを創設し、ザンビアでの熱傷などの治療成績を改善する取り組みを、四日市北ロータリークラブとルサカロタリクラブの支援により進めている。センターを設置する場所、教育用、

診療用の顕微鏡など具体的な使用方法について議論された。設置予定の手術室を視察した。



2. 在ザンビア日本大使館訪問 14:00～

大使表敬、医務官との意見交換

在ザンビア日本国大使館 特命全権大使

竹内 一之氏
一等書記官兼医務官 遅野井 雄介氏
二等書記官 松浦 謙二氏

(1) COVID-19のため中止されていた学部生のザンビア大学医学部との交流プログラムによる臨床実習が2023年から再開され、三重大学から5名の学生がザンビア滞在中である。これまでの協力への感謝をお伝えし、今後の協力をお願いした。

(2) 医学系研究科大学院では、文部科学省の国費外国人留学生優先配置プログラムに採択され、三重大学で博士を取得した医師麻酔科医、外科医、形成外科医が、それぞれザンビア大学で指導的な職に採用され活動していること

(3) 前述の四日市北ロータリークラブの協力を得て、本学形成外科とBanda Chihena医師で進めるマイクロサージャリー技術移転、トレーニングセンター創設プロジェクトに対して、機材の選定や搬入などに関して助言を得た。

- (1) ザンビアでの保健セクターの現状等の説明を受けた。
- (2) 三重大学医学部とザンビア大学医学部との交流プログラムについて、学部生の臨床実習が2020年から2022年はCOVID-19のため中止



2. レヴィ・ワナワサ 医科大学訪問 10:00～11:00

Levy Mwanawasa Medical University (LMMU) and its Teaching Hospital (Tour and Meeting with the Dean) (Dr. Chipaila Jackson が勤務している新設医科大学附属病院)

Dr. Chipaila Jacksonが肝胆膵外科ユニットのチーフを務める病院である。最近設立された、国立医学部単科大学であり、現代的な設備が揃ったキャンパスであった。医学部長と面談し、大学設立の理念や教育方針などの説明を受けた後、講義室など周辺施設を見学した。将来的に、三重からの学部生実習受け入れ先として検討していただければ、学生の受け入れ場所が増やすことができるという提案をいただいた。

3. ザンビア大学附属病院見学 11:30～12:30

University of Zambia, School of Medicine and the University Teaching Hospital (UTH). (本学協定校、Dr. Chihena Bandaが勤務している病院)
小児病棟、小児外科病棟、NICUなどを見学した。

4. ランチタイムセミナー 13:00～14:00

Lunch hour Seminar (Topic : Opportunities about Studying at Mie University Japan : 15 - 30 minutes, then Question and Answers : 15 minutes)

プログラム

- (1) Mpabalwani医学部長からのセミナー開催趣旨説明・国費外国人留学生優先配置プログラムの紹介 (10分)
- (2) 三重大学への国費外国人留学生優先配置プログラムと大学院での研究の実際について (澤田、15分)
- (3) 三重大学肝胆膵外科での大学院での研究 (水野教授、15分)
- (4) 留学とキャリア形成について (Kabwe医師)
対面とザンビア国内の主要病院へのWEB配信により約80名の参加があった。質疑応答内容とし

SPECIAL HYBRID FORUM

TOPIC
POSTGRADUATE STUDY
AT MIE UNIVERSITY
Japan

Apply ▶ Enroll ▶ Graduate

Panelists

 Prof. Shogo Mitano Head of Department HepatoBiliary Surgery Mie University, Japan	 Prof. Shiro Yamashiro Associate Professor UTH&A-Mie Coordinator Zambia	 Dr. Hirofumi Seno Associate Professor Pediatric Cardiology Mie University, Japan	 Dr. Jette Kabwe UTH&A-Mie Mie University, Zambia	 Dr. Elliot Kalamukache Dean School of Medicine University of Zambia Zambia
--	---	---	--	---

Moderator
Dr. Chihena Banda

All you need to know to get started on your Masters or PhD in ANY health-related field and more....

13TH June 2023
13:00HRS
UTH Main Lecture Theatre

Join online <https://meet.google.com/ang-rjbz-sji>

QR Code:

Google Meet

て、35歳の年齢制限が多く留学希望者の障壁となっていること、別のプログラムのオプションはあるか、がん看護などの看護系のコースは選択できるか、などの質問があった。本学が提供する国費外国人留学生優先プログラムが、ザンビア医師、学生のキャリア形成において非常に重要な役割を果たしていることや、大学からも人材育成の上で大きく期待されていることが、参加者の言葉から実感された。



5. Rotary meeting with Lusaka Rotary club

18:30～

現地参加：水野教授、澤田

三重大学医学部6年生（5名）、

ロータリー（松井氏、松岡氏、植村氏）

Drs. Banda Chihena, Jane Kabwe,

Chipaila Jackson

オンライン参加：堀研究科長、成島教授

それぞれ、自己紹介の後、形成外科マイクロサー

ジャリー技術移転プロジェクトの紹介を行なった。堀研究科長からの三重大学とザンビアとの交流紹介のあと、四日市北ロータリーメンバーによる茶の実演を行なった。ロータリーメンバーとザンビア大学関係者との交流機会となった。

6月14日

1. 周辺施設視察

Chaminuka自然保護区。ルサカ・ロータリーメンバー同行。

6月15日

1. 周辺施設見学

10:00 製麺工場視察

11:00 産科クリニック建設現場視察

13:00 ルサカロータリークラブメンバーと昼食

15:00 国立博物館見学

2. 訪問の報告

17:00 堀研究科長がルサカに到着。訪問団帰国に際し、ホテルロビーにて訪問の報告とザンビア大学の三重大学留学経験者3名を交えて意見交換。

18:30 訪問メンバーは空港へ出発



復路：6月15日～16日ルサカ発ドバイ経由羽田着；17日羽田発名古屋着

6月17日～

堀研究科長ザンビア大学、大使館、JICA事務所を訪問。

終わりに

実習に参加した医学部6年生にとっては、3年ぶりの国際的な交流からの学びの機会となり、充実した実習となったことが伺え、また、三重大学への国費留学で学位取得した医師が、ザンビア大学医学部の大きな期待を受け、それぞれの分野で先駆的な活動を精力的に実行していることが印象

的でした。私にとっては初めてのザンビア訪問でしたが、滞在中訪問した先々で、長年の三重大学とザンビア大学とのパートナーシップが認識され高い評価を受けていることが実感でき、今後さらに双方の成果につながる学部生、大学院生、教員各レベルでの交流への発展の可能性を感じました。

令和4年度 三重大学医学部優秀論文賞表彰授与式



令和5年6月21日（水）に令和4年度三重大学医学部優秀論文賞表彰状授与式が執り行われました。この賞は、三重大学の研究力強化のため、研究業績の質的評価に焦点を当てて、各部局から推薦された成果物について表彰を行う三重大学優秀論文・著者・作品賞の医学部版として行ったものです。

堀医学部長より受賞者へ表彰状が授与され、「ますますのご活躍に期待する」とのお言葉をいただきました。

受賞者及び代表者とその論文は下記の通りです。

●幹細胞発生学 山根 利之先生

Multiple cell populations generate macrophage progenitors in the early yolk sac

●消化管・小児外科 志村 匡信先生

Genomewide Expression Profiling Identifies a Novel miRNA-based Signature for the Detection of Peritoneal Metastasis in Patients With Gastric Cancer

●消化管・小児外科 尹 成増先生

Clinical significance of advanced lung cancer inflammation index, a nutritional and inflammation index, in gastric cancer patients after surgical resection: A propensity score matching analysis

●感染症制御医学・分子遺伝学 大塚 順平先生

Non-propagative human parainfluenza virus type 2 nasal vaccine robustly protects the upper and lower airways against SARS-CoV-2

●消化管・小児外科 問山 裕二先生

Prognostic impacts of tumoral expression and serum levels of PD-L1 and CTLA-4 in colorectal cancer patients

●幹細胞発生学 磯野 加奈先生

Simultaneous Fluorescent Identification of Odontoblasts and Ameloblasts

●消化器・肝臓内科 岩佐 元雄先生

Branched-chain amino acids and l-carnitine attenuate lipotoxic hepatocellular damage in rat cirrhotic liver

●ゲノム医療部 奥川 喜永先生

Modified intramuscular adipose tissue content as a feasible surrogate marker for malnutrition in gastrointestinal cancer

●精神科神経科 福山 考治先生

Pathomechanism of nocturnal paroxysmal dystonia in autosomal dominant sleep-related hypermotor epilepsy with S284L-mutant $\alpha 4$ subunit of nicotinic ACh receptor

●消化管・小児外科 志村 匡信先生

Novel evidence for m6A methylation regulators as prognostic biomarkers and FTO as a potential therapeutic target in gastric cancer

●整形外科 長谷川 正裕先生

Tenascin-C in Osteoarthritis and Rheumatoid Arthritis

●肝胆膵・移植外科 水野 修吾先生

Evaluation of hemostatic abnormalities in patients who underwent major hepatobiliary pancreatic surgery using activated partial thromboplastin time-clot waveform analysis

医学部オープンキャンパスを開催して

8/10（木）医学部医学科と看護学科オープンキャンパスが開催されました。対面での開催は4年ぶりとなり、当日は多くの方が来場されました。

両学科の教育紹介や入試についての説明に加え、特別講義も開催され、参加した方々は熱心に聞き

入っていました。

○医学科：学生246名

○看護科：学生139名、同伴者212名



医学科



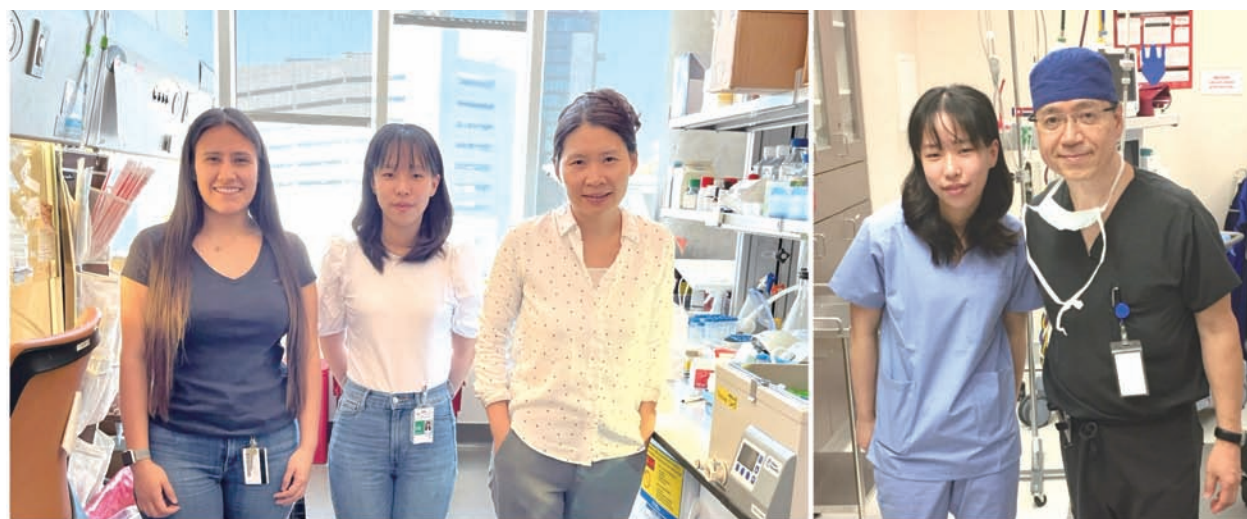
看護科

早期海外体験実習報告 米国での研究室研修

三重大学医学部医学科5年生 穴 太 智 子

2023年8月、アメリカ・テキサス州ヒューストンにあるUTHealth McGovern Medical Schoolで3週間の研究室研修を行いました。UTHealth Houston Center for Stem Cell& Regenerative Medicine幹細胞再生医療センターで、人iPS細胞を用いた気管・肺のオルガノイドに関する研究室に所属し、Sarah先生の下、3D細胞培養やスライドガラス作成、免疫染色、FACSなどの幹細胞に関する実験手技を学びました。通常の細胞培養に加えて、肺基底細胞に分化させる具体的な工程や、分化のそれぞれの段階に適した培地やプレートの使い方および培養の仕方、3D細胞培養特有の手技など、人iPS細胞を用いた実験手技獲得とともに、マウスに対する幹細胞を用いた

気管移植の見学を行うことができ、再生医療の実臨床応用化に向けた研究内容に触れました。また幹細胞センターがあるテキサスメディカルセンターは全米最大の医療センターと言われ、MdAndersonがんセンターやベイラー医科大学など多くの研究施設や病院が集結しており、研究室研修に加えてBaylor St.Luke Medical CenterとTexas Children'sでの病院見学や、医学生や医師との交流も行いました。またSurgery Centerでの1日麻酔科実習を通して、Izumi先生のシャドーイングをし、患者さんの術前の診察、麻酔の準備、オペ室での手術見学と術中管理、術後診療までの一連の流れを体験する中で、麻酔科医の役割とともに、周術期管理において患者・外科医・看



護師の方々とのコミュニケーションがいかに重要であるかを学び、コミュニケーションが医師のコアスキルであることを痛感しました。そして、ラボメンバーや現地の医学生や医師との交流はもちろん、世界中から集まる医学生や医師の方々と交流し、多くの刺激を受けました。滞在先のアパートでは、医療従事者や学生とともに、最先端の治療を求めて国内外から訪れた患者さんやご家族の方々と交流をするかけがえのない時間となりました。このような機会をいただきましたこと大変感謝申し上げます。今回の留学に関してご協力いた

だきました、安間先生や岡野先生をはじめとする本学免疫学研究室の全ての先生方、吉本先生、堀教授、および三重大学学生海外チャレンジ応援事業とトビタテ！留学JAPANに携わる全ての皆様に感謝申し上げます。また留学先で指導いただきましたSarah先生、Izumi先生をはじめ、ルームメイトのEmiliaやラボメンバーのNicoleを含め、多くの出会いと学びに感謝いたします。今後も引き続き研究室研修を続け、手技を学び努力を重ねるとともに、病院実習や海外エレクトティブ実習に活かしたいです。

早期海外体験実習報告

WHOラオス事務所研修とラオス国立小児病院実習に参加して

医学部医学科5年生 太田 亜 弥

2023年7月30日～8月10日、WHOラオス事務所とラオス国立小児病院にて研修をしました。

WHOラオス事務所研修ではボリカンサイ県（首都より車で4時間）の県病院の医療の質を改善することを目的とするプロジェクト（4日間）を見学しました。WHO、ラオス母子保健センター等の小児科医、産婦人科医、看護師計7名が講師として首都から現地に赴き、県保健省の職員（約20名）に対して、講義やロールプレイを通じて、どのように県病院の職員（約35名）への指導や帳簿管理を行うかを指導しました。最終日は県病院にて指導、帳簿の監査を行いました。講義ではルーレットを使って参加者の発言をうながしたり、果物、飲み物がふるまわれる小休憩をはさんだり、様々な工夫がされていました。笑いとは真剣な議論のバランスがとてもよく、参加者がリラックスして発言、質問できる和やかな雰囲気がありました。教育の大切さがよくわかる、大変勉強になる研修でした。

4日間は講師の皆さんと寝食を共にしました。

7名全員が、タイ、米国、韓国での留学／研修経験をもち、英語が堪能でした。夕飯は、みんなでお料理をとりわけ、氷入りのビールで何度も乾杯し（私は飲めませんが、）最後は生演奏カラオケ（デュエット）！お料理は毎食、野菜たっぷりでもとてもおいしく、とにかく楽しい！リラックスした雰囲気があり、とても居心地がよかったです。週末は、看護師の方が個人的に連絡をくださ



写真1：県病院で家族計画の帳簿を点検しているWHO職員（左）とラオス母子保健センター職員（中央）と太田（右）

り、寺院巡りにつれて行っていただきました。女性小児科医の方ともラオス女性が日常的に着ている民族衣装のお買い物やお子さんの習い事(柔道)、夕飯まで一緒させていただき、ラオスの人々の暮らしを垣間見ることができました。皆さん、ユーモアにあふれ、親切で、家族思いで、我慢がよく、穏やかで、聡明で、とても素敵でした。

首都から現地に向かうまでの道中は、緑豊かな風景が続きました。放し飼いの牛、ヤギ、犬が道路を横切ります。豪雨でのなか、大きな穴がたくさんあいた道を、複数人乗りのバイク、リヤカーにオートバイを付けた車両、荷台に子供が座ったトラック、整備の行き届いた高級車、大型トラックなど多様な車が疾走していききました。

翌週は国立小児病院で小児外科、血液腫瘍内科、救急外来を見学させていただきました。一番印象に残ったことは、上級医の先生方と学生の距離がとても近いことです。救急外来では学生全員（4－6年生5名）で一人の患者さんの問診・身体診察していました。学生同士で相談し、検査のオーダー／処方箋の案を考え、上級医に確認していました。突然やってきた私にも、聴診器をかせてくれ、診察するように促してくれました。隙間時間に上級医の先生からその日の疾患に関わる双方向のミニレクチャーを学生が受けていました。設備は簡素で、聴診器は学生全員で一つでしたが、学生の学習意欲と手厚い指導に感銘を受けました。

血液内科ではラオスで患者数の多い、サラセミア外来を見学しました。首都付近(人口約100万)の1100名の患者が通院しているそうです。病状により4－6週毎の定期受診が必要で、見学当日はおおよそ半数の患者さんが輸血が必要でした。金銭的な理由などで定期受診の間隔が伸びてしまう患者さんもあるとのことでした。

ラオスは人口約740万の内陸国でGDPは世界133位であり、自国で経済・教育・医療なども完結せず、外国資本が多く入ってきているようでし



写真2：看護師の方と一緒に首都の寺院を訪問しました。

たが、穏やかで明るい人々の暮らすとてもいい国でした。医療設備も限られてはいますが、真面目で聡明な医療者による地道な医療が行われている印象をうけました。「また、行きたい国」ナンバーワンです。今後はラオスと日本とのよりよい交流のお役に立てたらと思っています。

今回の研修は三重大学学生海外チャレンジ応援事業よりご支援を頂きました。また本学医学部長堀浩樹先生、日本WHO協会理事長中村安秀先生、WHOラオス事務所安東萌様、WPRO窪田祥吾先生、国立小児病院Dr.Vongphet、Dr.Bounpalisoneのお力添えがあり、無事研修を終えることができました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



海外臨床実習報告 イギリス・カーディフ大学

三重大学医学部医学科6年 加藤 俊太郎



この度、令和5年5月15日から6月16日までの約5週間、イギリス・カーディフ大学での海外臨床実習に参加させていただきましたので、その活動報告をさせていただきます。

コロナ禍明け、4年ぶりに海外臨床実習が再開することが決まり、受入国が発表された当初は実習先の選択に悩みました。私の将来のキャリアプランがホスピタリストであり、General Practitioner (GP) による家庭医制度が発達しているイギリスでの実習をまず希望しました。無事実習先が決定し、「日本とイギリスの間の医療・保険制度・医学教育の相違点を学ぶこと」を主な実習での行動目標とし、事前に学習準備を進めました。余談ですが、実習開始までの間大変であったことを一つ挙げると、私たち学生が主体的に現地の国際交流担当の方と連絡を取らなければならないことでした。必要書類・宿舎の手配や実習のスケジュール調整など全てを現地の教員と英語で行う必要があり、非常に骨が折れそうな思いでした。

手続きも無事終了し、5月15日より現地での実習が開始しました。6年生4人が本実習に参加し、

それぞれが選択した複数の診療科を1週間ないしは2週間ずつローテートしました。残念ながら当初期待していたGPに直接関わる実習はできませんでしたが、大学病院にて感染症内科を2週間、ICUを2週間、リウマチ科を1週間実習させていただきました。実習で印象的であったことを3つ紹介させていただきます。

1つ目は、感染症内科の外来実習での学びでした。HBVとHDV重複感染で外来フォローされている患者さんへの診療を見学し、指導医のDr. Alexが「この患者さんにはD型肝炎の治験を行っている」と説明してくれました。2023年5月よりイギリスにて慢性HDV感染症に対し抗ウイルス薬ブレビルチドの使用が認可されており、その臨床試験のことであると知りました。重症の肝線維症があり、ペグインターフェロン α に反応性がない当疾患の治療法として有望視されているとのことでした。イギリスの先進的医療の一面を見ることができました。

2つ目は、リウマチ科での実習でのことでした。リウマチ科では関節リウマチやSLEを中心とする多くの膠原病疾患の外来を見学させていただきました。



した。見学の中で、多くのリウマチ疾患の薬物治療にてヒドロキシクロロキンが併用されていることに気づきました。指導医のDr. Beynonによると、イギリスではリウマチに対してクロロキンは頻繁に使用される薬とのことでした。浅学ゆえに後に文献等で調べたところ、日本では現在でこそSLEとCLEにのみクロロキンの適応がありますが、1950年代にクロロキン乱用により網膜症が多発した歴史があり、クロロキンの使用が敬遠されてきた背景があると知りました。この一件から日本とイギリスを含めた欧米での診療の違いを相対化して考えることができ、貴重な機会となりました。

3つ目として、カーディフ大学の医学生の実習に関しての姿勢が非常に印象的でした。日本の医学生と違い、医学生の病棟での役割は非常に大きいと感じました。病棟患者の採血は、医学生が主体的かつ上級医の監督なしでおこなっていました。また、consultant（指導医）とともに回診を回りながら、医学生が紙カルテに所見を記録し、考えられる病態・鑑別疾患をconsultantと議論していました。治療に関してもまずは学生が立案し、上級医に相談して決定しており、日本の研修医と同じレベルに思えました。現地の学生から聞いたところによると、カーディフ大学を含めイギリスでは、一年次よりGPに関する研修や採血・バイタル測定など基本的臨床スキルの実習、患者中心の医療など臨床医学について学ぶ機会が用意されているとのことでした。そのような臨床に早期からしっかりと触れる学習がなされているからこそ、学生がチームの一員であるjunior doctorとして実習を行うような環境が形成できるのだと実感しました。上級医の診療の後追いをすることが中心となっている日本の医学部の“clinical clerkship”とは、いかに名ばかりのものかと痛感しました。

そして、大学病院にやってくる患者さんの多くから感じたのは、自身のかかりつけのGPに対する尊敬の意思でした。イギリスではGPが国民の



健康維持に不可欠な役割を果たしているのだという事実、間接的ではありますが気づくことができました。私の目指すホスピタリストと家庭医とでは、同じ総合診療医・総合内科医であっても異なる領域ではあります。しかし、generalistが基盤となっているイギリスの医療システムには、今後高齢化が一層進み多様なproblemを抱える患者さんの数が増えることが予想される日本において、採用すべき多くの点があるのではないかと考えました。今後キャリアを積み、generalistとしても一度イギリスに留学する機会を得たいと思うようになりました。

最後に、本実習では現地の学生と交流する機会が非常に多くありました。今年2月から3月までカーディフ大学から三重大大学に実習に来ていた学生と、現地で再会することができました。初めての地で不安を抱えながら長期間過ごすことになる私たちに対して、現地の生活・分化・実習での振る舞いなど、非常に多くのサポートをしてもらいました。実習期間最後まで特に現地でのトラブルなどなく過ごすことができ、支援してくれた現地の学生には感謝の念に堪えません。また、本実習をサポートしていただいた堀先生、形成外科の成島先生、秘書の品野様の他、多くの方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。

海外臨床実習報告 フィリピン大学レイテ保健部

三重大学医学部医学科6年 亀井 美 侑

2023年4月4日から5月5日に、海外臨床実習としてフィリピン大学レイテ保健部での実習を行いました。フィリピン大学レイテ保健部は地域で働く医師を養成することを目的とし、医師養成の場合在学9年間で助産師、看護師、医師の勉強をします。私達は医学を学ぶ現地の学生とともにコミュニティヘルスの実習を行いました。

フィリピンの医療制度は日本と大きく異なっており、病院とrural health centerに分けられます。病院は公立病院と私立病院があり、公立病院は治療にかかる費用はすべて無料ですが、病室が不足しているため廊下に患者を寝かしていたり、私物の扇風機で涼んでいるような状況でした。私立病院は治療費がかかる一方で、設備は日本と同等程度が保障されている状況でした。rural health centerは日本の保健所のような役割を担っており、各地域に1つ配置され、住民の健康管理やワクチン接種、家族計画の支援、簡単な診察などを行っています。

実習ではまず、様々な医療施設を見学させて頂きました。フィリピンでは住血吸虫などの寄生虫疾患がいまだに多くみられ、その専門病院を訪問させて頂きました。そこではフィリピンでも数少ない専門医の常駐や研究施設が併設されていたり、患者への治療、健康指導が行われていました。フィリピンは多様な言語が特徴的な国でもあり、絵を交えてわかりやすいように説明していた点が非常に印象的でした。他にも、出生数が非常に多い国であるという点に興味を持ち、助産院を訪問させて頂きました。フィリピンでは出産費用はすべて国が負担しており、助産院の設備は最低限必要なものという印象でした。この経験からフィリピン

の出生数が多い理由として、キリスト教という宗教上の理由や、出産の経済的負担が少ないこと、地域に根付いた国民性などが考えられると感じました。

実習後半は、ダガミとアランアランの2つの地域でコミュニティヘルスの実習を行いました。ダガミでは、献血活動、狂犬病のワクチン接種、現地の学生に通訳してもらいながら診察、処方を行ったり、今後行われる麻疹風疹のワクチン接種キャンペーンの宣伝活動にも参加させて頂きました。フィリピンでは野犬などの野生動物が非常に多いため、咬傷の患者が多く、狂犬病予防のワクチン接種日を定め治療していました。ワクチンの宣伝活動では、各村に出向いてポスターを貼ったり村リーダーの人に会って話しをしたりしました。道中、伝統的なお菓子を差し入れてもらったり、コミュニケーションをとる姿を見て、地域に密着した医療を実感することができました。アランアランでは、麻疹風疹のワクチン接種キャンペーンに参加しました。先述したようにフィリピンは子どもが非常に多いため、各村に出向いて今までのワクチン接種状況や健康状態、育児の悩みなどを



確認しながら、漏れのないようにワクチンを打ったり、ビタミン剤を配布したりしました。毎日50人ほどの子どもたちにワクチンを打っており、フィリピンの人口状況を実際に体感する実習となりました。

これらの実習は現地学生と同じ宿舎に宿泊し、共に行動しました。一緒に買い出しに行き食事を作ったり、水がでない時には水汲みにいったりするなど、慣れない土地での生活を助けてもらったり、実習後や休日には地域のお祭りや海に遊びに行ったり、屋台でスナックを食べたりしました。また英語の医学書で勉強していることやその意識の高さからも、大きな影響を受けました。

この5週間の実習を通して、フィリピンの医療事情を学ぶことで日本の医療制度の長所や短所について考えることができ、実践的な実習により異文化を含めた、地域密着型医療について多くのこ

とを学ぶことができました。また、現地学生との共同生活を通して交流を深めることができ、大きな刺激、影響を受けました。日本での実習とフィリピンでの実習での大きな違いは学生も医療スタッフの一人としての役割を任せられている点だと感じました。フィリピンではその責任ややりがいを感じながら実習に取り組むことができ、この姿勢は日本での実習でも同様に継続していこうと意識をあげるきっかけにもなりました。

5週間と短い期間ではありましたが、非常に多くの事を学び、経験することができ、充実した実習生活を送ることができました。この実習を行うためにご尽力いただいた堀先生、現地でお世話になったフィリピン大学の先生方に御礼申し上げます。今後もこの経験を活かし、よりよい医師になれるよう一層努力していきたいと思っています。

令和5年度三重県へき地医療体験実習・研修会に参加して

三重大学医学部医学科4年 宮 崎 洸 匠

令和5年8月24日から26日にかけて行われた、三重県へき地医療体験実習・研修会に参加しました。本実習・研修会は、へき地医療に関心のある全国の医学生を対象としています。初日と2日目は、学生が三重県内10か所の病院・診療所のうち希望した実習先でそれぞれ実習を行い、3日目には実習の報告を含む研修会が行われました。今年度は、三重大学生7名を含む計20名の学生が参加しました。本実習・研修会で、私が学んだことについてご報告いたします。

初日と2日目、私は紀宝町立相野谷診療所で実習を行い、診療所医師の森本真之助先生にご指導いただきました。初日は訪問診療に同行し、2日目は外来実習と地域保健実習を行いました。私は

「患者・住民の背景を知る」という目標を立て、実習に臨みました。訪問診療では、家を視ることで住民の生活の変化に気づくことができると学びました。また、ペットの健康状態が悪い場合は獣医に相談することで、住民の不安を解消できることも学びました。ペットも家族の一員であり、専門外だからといって切り捨てるのではなく、医師としてできることをする大切さが分かりました。訪問診療で「背景を知る」ために、患者さんと話をする機会をいただきました。しかし、どのような話をすればいいのか、何を質問していいのかが分からず難しいと感じました。その後、森本先生よりBBQ（Basic Background Questioning）アプローチをお教えいただきました。これは、話の仕

方・技術であり、「家族」、「仕事」、「住まい」、「日課」の4項目を聴くことで、その人とバーベキューをしたように仲良くなり、信頼関係を構築するというものです。この理論を学び、2日目の外来実習では森本先生のBBQアプローチを見学し、地域保健実習ではこれを実践することができました。

外来実習では、ご夫婦の診察を見学し、お互いのことをどう考えているか、それぞれの価値観について知ることができました。また、患者さんが仕事や畑など、何を大切なものとして考えているかも学びました。外来で出会った患者さんから、それぞれの物語（narrative）を知ることができました。物語を患者さんから教えていただき、価値観を理解することで、患者さんを病気ではなく人として診ることができると学びました。価値観が理解できると、患者さんが何のために治療してほ

しいのか、どの程度ケアしてほしいのかが分かります。そのため、「背景を知る」ことは大変重要であると感じました。

地域保健実習では、地域住民のお宅を訪問し、BBQアプローチを実際に使うことができました。紀宝町では、医師が保健師とともに医療・介護サービスを受けていない高齢者のお宅を訪問し、健康状態を確認するという事業をしています。私はこれに同行し、住民の方と話をすることができました。BBQアプローチを実践してみると、枠組みに沿って話を聴くという安心感があり、非常に話しやすかったです。その中で、住民の方の物語に触れることができ、どのような人生を歩んでこられたのかを知ることができました。患者さんや住民との信頼関係は気持ちだけではなく技術も使って構築できること、初日にうまく話せなかったの

令和5年度 三重県へき地医療体験実習 紀宝町立相野谷(おのだに)診療所



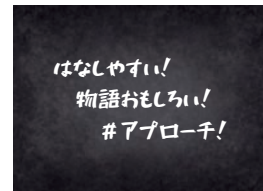
実習スケジュール	
8/24	午後 訪問診療同行
25	午前 外来実習
	午後 地域保健実習 振り返り
実習目標「背景を知る」	

三重大学 医学部4年
宮崎 洸匠(ひろなる)

目標：「背景を知る」

実習で学んだ事：BBQアプローチ（話の仕方・技術）

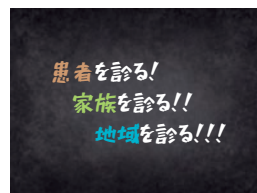
- ①話の項目 #家族 #仕事 #住まい #日課
- ②聴き方・順番
- ③実践した感想（何につながるか）



目標：「背景を知る」

実習で学んだ事：#で整理

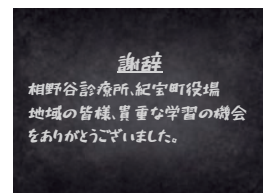
- ①訪問診療 #家を視る #ペットも家族
- ②診療所外来 #夫婦の診察 #仕事 #畑
- ③地域保健 #家族からみれば元気 #大切なもの



振り返り

実習で得た気づき：今後につながる3つの収穫

- ①目的を持って実習に臨めたこと
- ②背景を知る方法を学べたこと
- ③患者の物語について知れたこと



報告会で使用したスライドを添付

は技術を知らなかったからであることを痛感しました。

また、本実習全体を通して、私は五感を使うということも学びました。森本先生の診療を見学して、先生は患者さんの小さな変化に気づかれています。五感を意識することで、患者さんの小さな変化に気づくことができ、それへの介入、維持、予防などができることでした。そして、五感とは自然を感じることで研ぎ澄ますことができると教えていただきました。相野谷では、川辺で木々を見たりセミの鳴き声を聞いたりすることができました。実習中に自然を感じたり、美味しいものを食べたりしたことで、へき地だと自然を感じやすいと気づきました。普段の生活の中で五感を意識することで、臨床に役立てることができることを学びました。2日間と短い期間でしたが、私は本実習で「背景を知る」方法を学び、様々な物語に触れ、自然を感じ五感を使う大切さを知りました。これは、相野谷診療所で実習したからこそできたことだと考えます。

3日目の研修会では、意見交換会、へき地医療体験実習報告会、特別講演が行われました。意見交換会では、他の実習先で実習を行った学生や指導医と交流しました。へき地医療体験実習報告会では、私が行くことのできなかった実習先の状況

を知ることができました。私も相野谷診療所で学んだことの報告をしました。特別講演では、三重県立総合医療センターの脳神経外科医である梅田靖之先生よりご講演があり、へき地で働いてからでも脳神経外科のような専門医のキャリアへ進めることを学びました。

最後に、後輩へのメッセージとしまして、実習などの機会があればぜひ参加してほしいと思います。私は昔、実習やイベントに対して自分が参加していいのかハードルを感じていました。しかし、実際に参加してみると、とにかく楽しいです。今回のへき地での実習では、実際の診療現場の見学や住民とのふれあい、へき地ならではの自然を感じることができました。特に、BBQアプローチという技術を習得できたことは、診療やこれからの人生に必ず役に立つと考えています。これらは、大学や座学だけでは経験できないでしょう。現場に行くからこそ、へき地だからこそ学べることだと思います。少しでもこうした実習に興味がありましたら、積極的に参加していただけると必ず学びあるものにできると信じています。

相野谷診療所、紀宝町役場、紀宝町住民、三重県庁の皆様より貴重な学習の機会をいただきました。指導医の森本真之助先生には多大なるご指導とご助言を賜りました。心より感謝申し上げます。



三重大学・鈴鹿医療科学大学合同 「慢性疼痛」ワークショップに参加して

眞鍋 君唯（サポーター）：

私は4年生で、すずみえという団体に所属しています。すずみえは、2年生でワークショップに参加した人が3年生以降、サポートする側でワークショップに携わることを目的とした団体です。私も2年生のときにワークショップに参加していました。

サポーター視点ならではの学びも多くありま

す、特に学年が上がるほど、授業が専門的な内容になっていき、他の医療系の職種について考えが及ばないことがどうしても増えてしまいます。このワークショップに参加すると様々な業種の人がいてこそ医療が成り立っていることを痛感します。また先生方と協力し授業を行うときもあるので、より気軽に先生からお話を聞けたりできます。

鍼灸や理学療法、心理など各医療分野を担当す



る教員から直接、実践的な学びを享受できる機会は大変めずらしいと思うので、興味のある学生はぜひ受講をおすすめします。

木村 怜慈（参加者）：

私は1年生のころからすずみえという団体に所属しており、1年生だった昨年はサポーターとして、そして今年は参加者として、慢性疼痛ワークショップに参加させていただきました。

このワークショップは、三重大学の医学科、看護学科の学生に加え、鈴鹿医療科学大学の学生も参加しています。鈴鹿医療科学大学の学生は薬学科、理学療法学科、鍼灸サイエンス学科などの三重大学にはない医療職を目指す学科に所属している人も多くいます。こうした様々な専門職を目指す仲間とグループワークで共に事例を検討していくことができるというのが大きな魅力の1つです。

ワークショップは3日間のプログラムで構成されています。

1日目はオリエンテーションを受けた後、3日間を通して関与していくひとりの患者さんの簡単な紹介があり、この事例にどのように関わり、治療していくかを念頭に3日間様々なプログラムを



体験していくことになります。次に、神経ブロック、筋弛緩、鍼灸などの痛みに対して実際に行われている取組みを専門家の先生方から体験を通じて学んでいき、1日目の最後には3日間にわたり様々なグループワークを行っていくグループに分かれ、「チーム」について考えました。

2日目は1日の最後と同じように「チーム」について考えた後、福祉、薬膳、理学について専門家からの講義を受け、実際に理学療法のストレッチを体験しました。

3日目は1日目に紹介のあった患者さんの事例について、様々な医療職を目指している学生が集まっているグループでそれぞれの職種の背景や価値観などに配慮しながら、患者さんはこういった問題を抱えているのか、そしてこういった治療やケアを行っていくことが良いのかなどについて議論し、実際にロールプレイにも参加しました。

この3日間の慢性疼痛ワークショップを通じて、慢性疼痛に対して様々な専門家が多方面からのアプローチをチームで考え、治療やケアに行っているということを体験を通じて学ぶことができました。そして、自分が将来目指している職種が慢性疼痛に対してこういった役割を担っているかも知



ることができ、普段の大学での勉強に対しても良い刺激になりました。前述の通り、この慢性疼痛ワークショップには三重大学医学部と鈴鹿医療科学大学の学生が参加しています。慢性疼痛につい

て多角的に学べるだけでなく、他大学の学生と交流することができる貴重な機会でもあるので、このワークショップに少しでも興味があればぜひ受講してみてください。

学会だより

第9回 MatriCellフォーラムを開催しました

脳神経外科 川 北 文 博

9月2日(土)、3日(日)、脳神経外科学教室の鈴木秀謙教授が当番幹事として第9回 MatriCellフォーラムを三重大学病院三医会ホールにて開催致しました。

MatriCellフォーラムはマトリセルラー蛋白をテーマとしております。マトリセルラー蛋白とは誘導型の細胞外マトリックス蛋白の1つであり、組織液中に分泌される非構造蛋白で、様々な機能を発揮することが知られていますが、その役割については明らかになっていないことが多く、そこでマトリセルラー蛋白の病的意義を明らかにすることが本学術集会の役割となります。

当日は一般演題11題に加えて三重大学マトリックスバイオロジー研究センターとのジョイントセッション10題の発表があり、多分野にわたりエ

キスパートの先生方から最新知見を発表して頂き、活発な討議が交わされました。加えて特別講演には三重大学大学院工学研究科 分子素材工学専攻 生体材料化学講座 教授 宮本啓一先生をお招きし、工学の視点から「生体材料としてのエラスチン・フィブリリン」についてご講演賜りました。

個人的な感想としては脳神経外科学、特にくも膜下出血後の遅発性合併症においてはその病態が解明されているとはい言い難く、そのヒントとなり得る報告に触れることができ、非常に有益な学会であったと感じております。

最後に、準備段階より吉田利通先生、今中-吉田恭子先生、長谷川正裕先生には、格別のご尽力を賜り誠にありがとうございました。また、運営に関係した多くのスタッフの皆様には多大なるご



協力を頂きました。無事盛会に終わることができましたことに、この場をお借り致しまして心より

御礼申し上げます。

日本脳神経外科学会中部支部学術集会 「ベスト座長賞」を受賞して

脳神経外科 助教 北 野 詳太郎



私は2023年4月に長野県で開催されました第103回日本脳神経外科学会中部支部学術集会にて「ベスト座長賞」に選出していただきました。私はサブスペシャリティーを脳腫瘍・小児疾患としており、当学術集会にて腫瘍のセッションを座長として担当させていただきました。自分の研究・臨床経験を発表したわけではないのですが、座長を担当するからにはと、他施設の発表内容を事前学習し、当集会に臨みました。地方会という特性上、珍しい症例の1例報告がおおく、自分は発表ならずとも大変勉強になりました。事前学習すると、他施設の工夫に感銘を受けたり、こうしたらもっとよいのではないかとというアイデアも浮かんできて、大変有意義な学術集会でした。

今回の受賞は、当科で週に3回に開催されてい

る朝のカンファレンスの成果であると考えております。当科はサブスペシャリティーが比較的細分化されており（脳血管障害、脳腫瘍、脊髄脊髄、小児、機能外科など）、また大学病院という特性上、最新の研究・診療していると思っております。そのため、正直自分は他分野の知識がおいついておりません。つまり逆に言えば、自分のサブスペシャリティーの分野の症例を適当に（曖昧なまま）プレゼンしてしまうと、脳神経外科専攻医や他の分野をサブスペシャリティーにしている先生の方々に、プレゼン内容について、誤解を与えてしまう可能性があると考えております。そのため、普段から事前に論文などで、しっかり下調べをおこなってからカンファレンスに臨んでおり、その成果を出すことができたのではないかと思います。またカンファレンスの際に、熱い議論を交わされることも多々あり、カンファレンスに参加しているだけで大変勉強になりました。この場をお借りし、当科のすべての先生方に深く感謝申し上げます。今回の受賞を励みに、これからも日々精進して参りますので、今後とも御指導御鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。



The Journal of Human Lactation Best Research Article with a Practice Focus Award

母性看護・助産学 安 積 陽 子

“An Evaluation of the Signs of Nipple Trauma Associated With Breastfeeding : A Delphi Study.” が、Journal of Human Lactationで、授乳実践におけるエビデンスの発展に寄与したとして、年間トップ5論文に選ばれました。Journal of Human Lactationは、The International Lactation Consultant Association (ILCA) の機関誌です。ILCAは、「母乳育児と熟練した授乳ケア」によって世界中の人々の健康促進を目指す団体です。2023年8月13日～15日には、ILCA 2023 Annual Conference（ラスベガス、米国）が開催され、筆頭著者が表彰されました。

母乳育児は、母児の愛着形成や疾患リスクの減少等の多様な意義が報告されています。多くの女性が妊娠中に、できれば母乳で育てたいと希望しています。しかし、母乳栄養の割合は10年前に比べ増加傾向にあるとは言え、生後1か月で51.3%、生後3か月で54.7%です。母乳育児を断念する原因の1つに、新生児の乳房の吸吮刺激に伴う乳頭損傷が指摘されています。これまでに、乳頭損傷の予防や損傷時の対処方法に関する臨床的な試みは数多く報告されてきています。しかし、乳頭損傷の種類や発生頻度など系統的に調査した研究は、ほとんどありませんでした。そこで、私達は、乳頭損傷の種類や発生時期を明らかにするべく、出産後からの産褥期間中の乳頭の画像をデータとして、様々な検討を行っています。

本論文は、先行研究で私達が特定した7つの乳頭損傷の定義のコンセンサスを得るために、母乳育児支援の専門家や皮膚科、形成外科の専門家及びアドバンス助産師を対象にデルファイ法を用いた研究です。本論文で乳頭損傷の定義を提供する

ことによって、乳頭損傷のアセスメントの向上に繋がると考えています。さらに、本論文では、それぞれの乳頭損傷の発生原因にも触れています。そのため、所見ごとにどのような対処が望まれるか方向性を示しています。

本論文のテーマは、約7年前、筆頭著者が修士課程の学生であった時に指導教員として関わり、現在まで共に進めてきているものです。思い起こせば、この研究は、学内の意見交換の場では、研究目的、意義、手法について、不評でした。反対意見はありましたが、助産師として、母乳育児支援に貢献できる研究の構想であるかどうかを中心に据え検討を繰り返しました。これを皮切りに、いくつか壁を乗り越えてきました。1つの研究では貢献度は低いため、実現しうる目標を定め、段階を踏んで、前に向かって研究を続けることも大切にしてきました。この取り組みを通して、修士課程の大学院生とはいえ、同じ志を持つ研究者と探求することの面白さを改めて知りました。また、一人の院生が着実に研究者として成長する姿を見ることによって、人の可能性を信じることの大切さも学びました。これからも、一人でも多くの院生や研究者と、共に探求する関係性を作りながら、研究に精進したいと改めて思います。

論文の詳細

An Evaluation of the Signs of Nipple Trauma Associated With Breastfeeding: A Delphi Study. Maya Nakamura, Yoko Asaka, 2022 Feb ; 38(3) 548–558. DOI : 10.1177/08903344221076527.

第143回日本薬理学会近畿部会優秀発表賞

統合薬理学 中 瀬 隼 斗

この度、2023年6月24日にウインクあいち（愛知県産業労働センター）で開催された第143回日本薬理学会近畿部会において、優秀発表賞を受賞することができましたので、ご報告させていただきます。

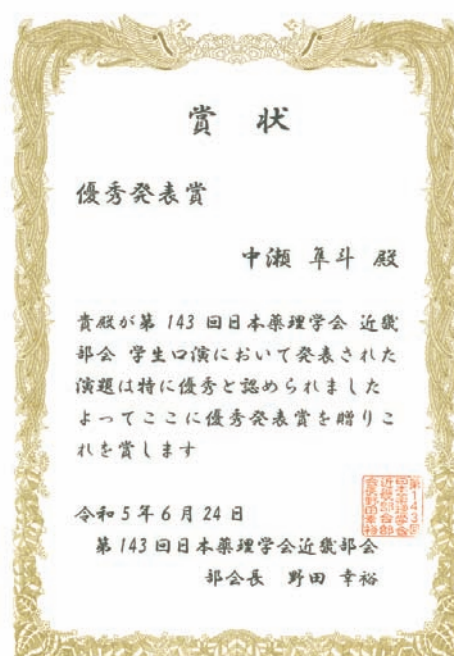
本学会では、「非アルコール性脂肪性肝炎における線維化関連シグネチャーの探索」という演題で口頭発表をさせていただきましたので、具体的な研究内容について説明させていただきます。

非アルコール性脂肪肝炎は肝硬変や肝臓がんへと進行する場合があることや、患者数が世界的に増加していることから、病態機序の解明と治療方法の開発が課題となっています。また、非アルコール性脂肪性肝炎では、複数の病態がありますが、特に肝臓の線維化が重要な予後因子であると考えられております。

そのため、本研究では、非アルコール性脂肪肝炎の患者から肝生検により採取された、肝組織における遺伝子発現を複数のデータセットにわたり、網羅的に解析し、肝臓の線維化と関連する新たな遺伝子を複数発見しました。また、動物モデルとして薬剤投与により線維化を起こしたゼブラフィッシュを用いて、この肝臓の線維化と関連する新たな遺伝子について、この解析結果の妥当性を検証しました。本研究の結果から、非アルコール性脂肪性肝炎における線維化に関与する可能性の高い遺伝子を同定することができ、非アルコール性脂肪性肝炎の病態機序の解明と治療方法の開発に貢献できるのではないかと考えております。

私は医学部医学科4年生の学生で、医学科のカリキュラムである研究室研修を通じて、西村有平教授の主宰される統合薬理学研究室に所属して

ります。私にとって学会発表にて表彰をしていただくというのは、今回が初めての事であり、大変有り難く貴重な経験をさせていただいたと感じております。今後も、より一層の研究や学術活動に取り組み、より高みを目指す努力を惜しまない所存です。そして、このような栄誉を受けることができるような人材として成長し、社会への貢献を果たしていく所存です。最後に、本学会において受賞するにあたりご指導を賜りました西村有平教授、白水崇助教をはじめとする統合薬理学講座の皆様、支えてくれた学友や家族にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。



三重大学優秀論文・著書・作品賞を受賞して

三重大学医学部附属病院 消化管小児外科 小 池 勇 樹



この度、私は、三重大学の開学記念日である5月31日（水）に、令和4年度 三重大学優秀論文・著書・作品賞を受賞させて頂きました。大変光栄に思います。この賞は、本学の研究力強化及び優れた研究活動に対し、成果物（主に英語論文）について選考を行い、受賞者が決定されるそうです。今回のこの受賞に関しては、主に私が研究留学（2015年4月から2017年3月までの2年間）していたカナダ トロント大学 Sickkids hospitalでの研究業績が評価されたと感じております。この海外留学の機会を与えて下さった医局員の先生方には、心より感謝しております。

留学先では、元々三重大学で取り組んでいた「多光子レーザー顕微鏡を用いた各種疾患モデルマウスにおける生体リアルタイムイメージング」の実験手法を武器に、留学先でのメインの研究テーマ「新生児壊死性腸炎の病態解明」に関する研究を多数させて頂くことができました。この生体リアルタイムイメージングは、三重大学解剖学第一講座の溝口明元教授のご指導のもと、また、たくさんの消化管小児外科の先生方とともに、長年に渡る地道な研究と、多くのトライ＆エラーを乗り越

えて完成させた完全に三重大学オリジナルの実験手法になります。留学先でも「どうしてこんな綺麗で鮮明な画像が生きたまま観察できるの!？」と、海外の大御所研究者からも驚きと賞賛をたくさん頂き、大変嬉しく思いました。この三重大学オリジナルの実験技術を用いて、新生児期の致死的な疾患である壊死性腸炎の病態解明に取り組み、その集大成としての研究結果がNature communications (Nat Commun. 2020 Oct 2 ; 11 (1) : 4950.) に掲載されました。

帰国後は、「この実験系により得られる画像やデータを何とか臨床応用できないか?」ということを考え、「腸管神経叢の先天性欠如が病態の原因であるヒルシュスプルング病の手術時に応用できるのではないかと、研究を進展させております。現在のところ、手術時の切除腸管を用いて腸管の漿膜面より腸管壁を傷つけることなく腸管神経叢のネットワークを観察し、これまでの術中迅速病理診断では得られない神経叢のサイズや神経束の数など有用な情報が瞬時に得られることを実証しております。今後は、この研究をさらに発展させ、「手術中に腸管の至適切除ラインの同定」に結びつけることができれば、この疾患で苦しむ患児達のQOL改善に繋がると信じて、引き続き善処したいと考えております。

最後になりますが、私がこのような栄誉ある賞を頂きましたのは、溝口先生や消化管小児外科のよき上司の先生方のご指導と、よき同僚、よき後輩に恵まれたおかげです。本当に心より感謝を申し上げます。

第28回日本緩和医療学会学術大会優秀演題賞を受賞して

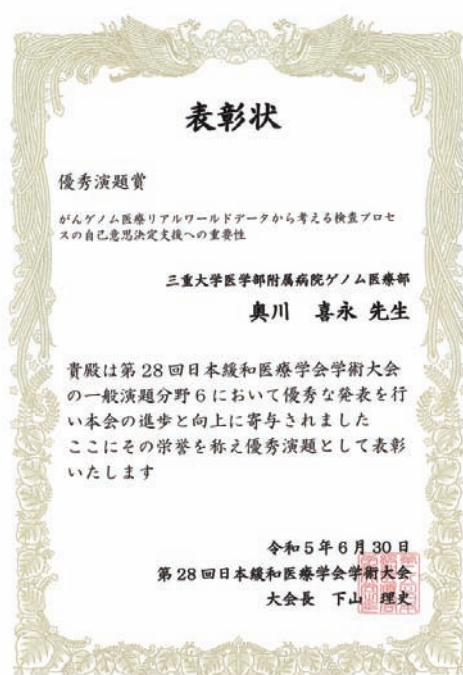
三重大学病院 ゲノム診療部 教授 奥 川 喜 永

日本緩和医療学会は、1996年に創設され、学術研究を始めとする活動によって、エンド・オブ・ライフケアの質を高め、重篤な疾患を持つ患者と家族のQOLとQODを向上させることを目的に活動している学術団体です。このたび、第28回日本緩和医療学会学術大会において、優秀演題賞を受賞することができましたのでご報告いたします。

がんゲノム医療の本邦におけるこれまでの動きは、2015年に「ゲノム医療実現推進協議会」が設置され、2017年には厚生労働省が「がんゲノム医療推進コンソーシアム懇談会」を設置し、がんゲノム医療の社会実装に向けた体制の整備が始まりました。そして2019年にはがんゲノム医療の窓口となるがん遺伝子パネル検査が保険承認となり、さらにそれを実践していく医療機関としてがんゲノム医療中核拠点病院・拠点病院・連携病院が指定されました。当院も2019年から全国33施設あるがんゲノム拠点病院として、厚生労働省より指定を受け活動をしてきました。しかし、三重県内において、がんゲノム連携病院の指定要件を満たす施設は2022年までは一つもなく、当院が県内のがんで苦しむ患者様にがん遺伝子パネル検査を提供してきた経緯があります。また、がん遺伝子パネル検査は、標準治療が終了・または見込まれる段階の全固形癌患者にのみ、保険適応として提供可能であること、そしてこの検査を受検しても1割の症例しか薬剤に到達しない現実から、難しい病状の患者様に、薬剤につながらない結果説明も含めて、柔軟に対応することが、患者様のあらたな“いたみ”を生み出さないためにも重要となります。そのような背景から、これまで当院がゲノム拠点病院として指定を受け、保険適応としてがん

遺伝子パネル検査の提供を開始したこの3年にわたる、紹介いただく患者様を中心に地域医療機関の医療従事者との連携を重視した当院独自の取り組みを報告し、その成果が高く評価され、このたび日本緩和医療学会よりこのような栄誉な賞を受賞する機会を得ることができました。

このような栄誉ある賞をいただける場に立つことができたのは、ひとえに三重大学病院のさまざまな皆様のお力添えがあつてこそだと深く感謝しております。ゲノム医療部の医師や事務補佐員、病理部、腫瘍内科、がん支援センター、エキスパートパネルに参加いただく各診療科の主治医の先生がたや薬剤部や看護部、他院からの情報共有をしていただく緩和ケアセンター、紹介対応を迅速に外来予約調整いただく総合サポートセンター初診受付、医事課、そして貴重な症例をご紹介い



ただく三重県内の主治医を含む医療従事者の方々に、この場をお借りし、深謝いたします。今後も、三重大学病院の発展と三重県におけるがん患者様の治療に少しでも貢献できるよう、患者様の満足

度につながるがんゲノム医療の提供を目標に鋭意邁進してまいりますのでご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

第32回日本病態生理学会大会 学部生・修士課程大学院セッション 優秀賞を受賞して

統合薬理学 八十島 左 京

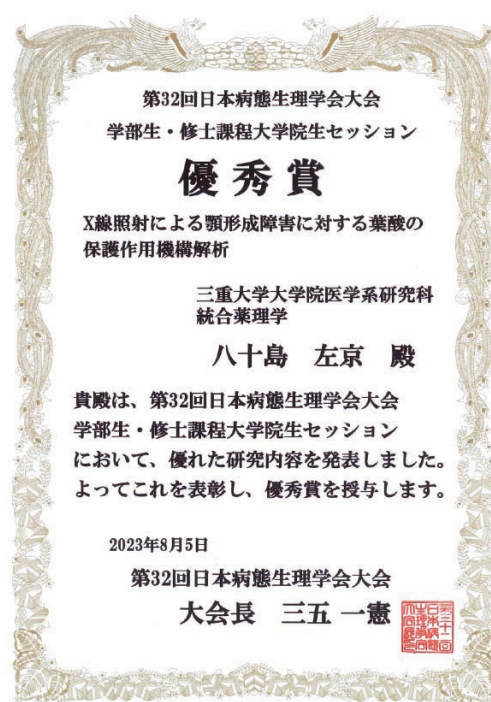
この度、2023年8月5日（土）～8月6日（日）にベルサール西新宿（新宿区）にて開催されました第32回日本病態生理学会大会において学部生・修士課程大学院セッション優秀賞をいただきましたので、謹んでご報告を申し上げます。演題名「X線照射による顎形成障害に対する葉酸の保護作用機構解析」

さる2023年3月18日（土）にオンラインにて開催されました日本病態生理学会第1回 UnderGraduate Spring Forum (UGSF) にて、最優秀賞の栄誉を賜りました。今回の発表はそれを受けて日本病態生理学会よりご支援をいただいたの選抜発表という形になりました。大会長の東京都医学総合研究所疾患制御研究分野の三五一憲先生をはじめとする大会関係者の皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。大会中は活発な双方向的な議論が展開され、私にとって大変勉強になるとともに、貴重な経験となりました。

以下に研究内容について簡単にご紹介申し上げます。

本研究では受精36時間後の仔魚に8 GyのX線を照射すると下顎形成が著明に障害されること、X線照射1時間前に葉酸を投与するとその障害が抑制されることを見出しました。また、X線照射24時間後の γ -H2AX増加と、葉酸投与によるその抑制を明らかにしました。さらに、RNA-Seq解析によりX線照射1時間後においてLMX1B標

的遺伝子が葉酸投与により増加していることを見出しました。これらのLMX1B標的遺伝子の中に、DNA損傷に対する保護的作用が示唆される遺伝子が複数含まれていました。最後に、RNA-Seq解析とは異なるサンプルデータを用いた定量PCRによってこれらの遺伝子の葉酸投与による発現上昇を確認することができました。以上より、X線照射による下顎形成障害と葉酸の保護作用に、X線照射によるDNA損傷と、葉酸投与によるLMX1Bシグナル増強が関与する可能性が示唆されました。さらに解析を進めることで、先天異



常における病態生理の一端解明に繋がり得ると考えております。

私は本学医学部医学科3年生であり、2021年5月より西村有平教授が主宰される統合薬理学講座にて新医学専攻コースに在籍する学生として活動をさせていただいております。今回のin silicoデータをin vivoで検証し発表に至るという一連の経験は私にとって貴重なものになりました。本受賞を励みに日々の研究活動や勉学により一層精進し

て参ります。

最後に、本受賞に際しご指導を賜りました西村有平教授、白水崇助教をはじめとする統合薬理学講座の方々、UGSFにおいて発表の機会を与えていただきました愛媛大学大学院医学系研究科分子細胞生理学分野の田中潤也教授、日頃支えてくれている友人、先輩、後輩、家族にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

第55回日本動脈硬化学会学術集会・ポスター優秀賞受賞

形成外科 細 見 謙 登



第55回日本動脈硬化学会学術集会（2023年7月8－9日ライトキューブ宇都宮）にて、「nanoSPECTによる褐色脂肪組織へのCD36を介した酸化LDL集積機構の発見」の演題で「ポスター優秀賞」を受賞しました。

形成外科の細見と申します。信州大学総合医理工学研究科・医学系専攻を2023年3月に修了し、4月より三重大学形成外科に赴任となりました。大学院での研究に関する発表になりますが、現在

の三重大学形成外科で行う研究も含め、謹んでご報告申し上げます。

発表概要：

動脈硬化の主要な原因のひとつであるLDLは、（酸化）変性することにより動脈硬化を強力に促進する性質を獲得します。そのため、この酸化LDLの循環血液中からの除去メカニズム解明が古くからの課題でした。しかし、「酸化LDLは主に肝臓で代謝除去される」という理解のまま長らく進展がありませんでした。

本研究ではマウスへの高感度イメージング技術の開発により酸化LDL除去に寄与する新たな臓器を見出しました。全く見逃されてきた褐色脂肪組織で高い効率で集積すること、CD36を介するというメカニズムをマウスと培養系の実験で初めて明らかにしました。

褐色脂肪組織は成人で肩甲骨周囲に存在し、エネルギー代謝への関与が示されてきました。最近、心血管代謝性疾患を抑制する可能性が示され注目されていますが、どのように抗動脈硬化機能を発揮するのが不明でした。本研究により、動脈硬化惹起性LDLの除去という明確な視点を提示す

ることができ、課題であった褐色脂肪組織のイメージングの新たな手法を開発することができました。

本研究成果は、Cardiovascular Researchに掲載されています。

「NanoSPECT imaging reveals the uptake of 123I-labelled oxidized low-density lipoprotein in the brown adipose tissue of mice via CD36」
DOI:10.1093/cvr/cvac167

現在形成外科では驚愕の組織再生力を持つイモリを対象として、イモリ型再生医療の確立を目指した研究を行っています。イモリは“切断さ

れた四肢や部分切除された心臓までも再生可能”、“線維化が非常に少ない”、“生涯がんにならない”という驚きの特徴を持ち、多くの医学的課題を生まれながらにして解決している存在とも言えます。ただ、イモリは解剖学すらはつきりしておらず、わからないことだらけです。信州大学での経験を糧に、現在三重大の先生方の協力を得ながら一歩ずつ着実に研究を進めております。今後はイモリの研究で今回のような賞につながる楽しい研究発表ができるよう日々精進してまいります。今後ともよろしくお願いいたします。

第250回日本内科学会東海地方会を開催しました

三重大大学医学系研究科リウマチ膠原病内科 教授
三重大大学医学部附属病院リウマチ・膠原病センター 中 島 亜矢子

2023年6月25日に、第250回日本内科学会東海地方会を桑名市の柿安ホールで開催しました。オンラインでしたが、循環器、消化器、呼吸器、血液、神経、腎臓、内分泌・代謝、アレルギー膠原病、感染症、腫瘍の10領域で、演題数107題、376名の先生方の参加があり、活発な質疑応答が行われました。特設託児所を利用して参加された先生方もいらっしゃいました。桑名市医療センターの研修医の先生方にも、進行係など担当していただきありがとうございました。

内科学会東海地方会は、三重県、愛知県、岐阜



県、静岡県の4県で持ち回りで行われます。前回の三重県での開催の際はコロナ禍で、演者も座長もオンライン登壇でしたので、2019年以来、4年ぶりの三重県での現地開催となりました。同時に開催された第80回日本内科学会生涯教育講演会に

は現地会場に151名の参加があり、その後のオンデマンド配信には714名の先生方が聴講されたそうです。

学会参加は現地に限る！を実感しました。

第96回日本内分泌学会学術総会

愛・内分泌賞（優秀演題賞）を受賞して

糖尿病・内分泌内科（臨床研修・キャリア支援部） 西 濱 康 太

第96回日本内分泌学会学術総会の一般演題（WEB）セッションで発表した演題「当院での免疫チェックポイント阻害薬に関連した1型糖尿病の臨床経過」を愛・内分泌賞（優秀演題賞）に選出いただきました。がん薬物療法の重要な役割を担う「免疫チェックポイント阻害薬」に特徴的な有害事象の1つである「1型糖尿病」に対する当科のアプローチを共有することができました。WEB発表での質疑応答は学会WEBサイト上のコメント機能を用いて行われましたが、会期中は私の発表および回答コメントを全ての学会参加者が自由に閲覧することができるため、口頭での質疑

応答とは異なる緊張感がありました。免疫チェックポイント阻害薬に関連した有害事象には1型糖尿病だけでなく、下垂体、甲状腺、副腎などを標的とした内分泌障害があり、がん患者さんがより安全に免疫チェックポイント阻害薬を含むがん薬物療法を受けていただけるよう、学びを深めたいと思います。

共に患者さんの診療に取り組み、今回の発表に関し助力いただいた皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。さらに質の高い診療が提供できるように尽力いたしますので、引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

第250回日本内科学会東海地方会若手優秀演題賞を受賞して

三重大学医学部附属病院 研修医 酒 井 唯 梨
腎臓内科 辻 本 佳 世

この度、2023年6月25日に三重県桑名市で開催された第250回日本内科学会東海地方会において研修医の酒井唯梨先生が若手優秀演題賞を受賞しましたのでご報告させていただきます。

受賞した発表演題は「遺伝子診断で確定したGitelman症候群の1例」です。Gitelman症候群は、低カリウム血症、代謝性アルカローシス、低マグネシウム血症、低カルシウム尿症などの臨床所見

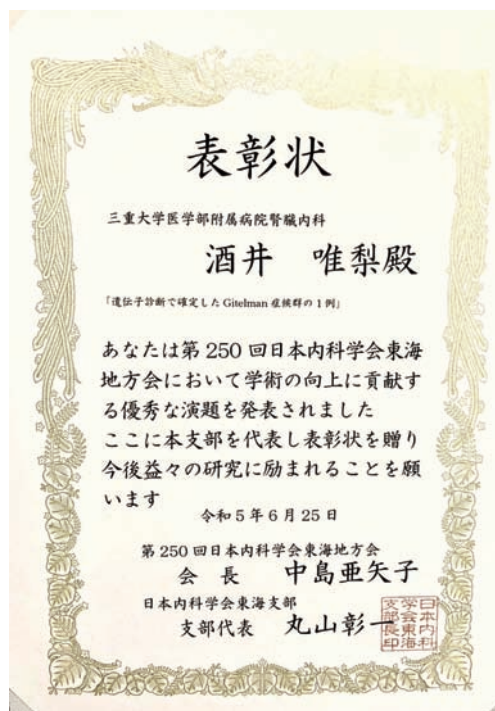
を示す疾患であり、遠位尿細管の $\text{Na}^+\text{-Cl}^-$ 共輸送体をコードするSLC12A3遺伝子の変異が原因となります。類似疾患のBartter症候群と比較してGitelman症候群は発症年齢が高く、低カルシウム尿症を認めますが、確定診断のためには遺伝子解析が必要です。今回、カリウム排泄亢進に伴う低カリウム血症、重炭酸イオン高値、低カルシウム尿症、マグネシウム排泄亢進に伴う血清マグネシ

ウム正常値下限、尿蛋白陽性などを認め、腎生検、遺伝子検査を施行しました。腎生検では、傍糸球体装置の過形成を認め、同部位でレニン染色陽性像を認めました。また、遺伝子検査でSLC12A3にヘテロ接合でc.1732G>A、c.2537_2538delTT、c.2573T>Aのバリエントを同定し、Gitelman症候群と確定診断しました。c.2537_2538delのバリエントが本症例において血清マグネシウム正常下限値、マグネシウム排泄亢進に関与している可能性が示され、本学会で発表となりました。

今回、研修医の酒井唯梨先生とともに学ばせていただきましたが、先生は普段の研修態度も非常に意欲的で、学会発表の準備も熱心に取り組んでおりました。また、今回初めての学会発表とのことでしたが、学会本番も特に緊張を感じさせることもなく、質疑応答もスムーズに行っており、これからの活躍についても楽しみです。

最後になりますが、日頃よりご指導を賜り、今回の学会発表にあたってご指導を賜りました、

土肥薫教授、片山鑑先生、村田智博先生をはじめ、循環器・腎臓内科の先生方にこの場を借りて深く御礼申し上げます。今後ともご指導・ご鞭撻のほど何卒宜しく願いいたします。



学位記授与式

令和5年7月19日（水）、伊藤学長より3名の方々に三重大学博士（医学）の称号が授与されました。学位記は25日（火）および28日（金）に医学部附属病院（研究科長室）において、堀研究科長より授与されました。

令和5年9月25日（月）三翠ホール（小ホール）において学位記授与式が挙行政され、伊藤学長より3名の方々に三重大学修士（医学）、17名の方々に三重大学博士（医学）、1名の方々に三重大学修士（看護学）、2名の方々に三重大学博士（看護学）の称号が授与されました。



三重大学医学部の理念

Mission and Core Principles of Mie University Faculty of Medicine

確固たる使命感と倫理観をもつ医療人を育成し、豊かな創造力と研究能力を養い、人類の健康と福祉の向上につとめ、地域および国際社会に貢献する。

Mie University, School of Medicine aims to raise medical personnel with a steadfast sense of mission and ethical view, and to cultivate in it students and faculties both rich creativity and research capacity.

The school will strive for development of human health and welfare and contribute to regional and international society.

— 編集発行 —

三重大学 医学部ニュース編集委員会

〒514-8507 津市江戸橋2-174

国立大学法人 三重大学医学・病院管理部

TEL. 059 (232)1111(代表) FAX. 059(232)7498

E-mail : s-hisyokoho@mo.medic.mie-u.ac.jp
